

やくしかノート 食べ物編

作 揚妻直樹・揚妻・柳原芳美

五月十三日 昼ごろ 屋久島西部の道路端

私は森の中を通るこの道路の脇に車を停めてよく昼寝をする。道路端から張り出した木々がつくる日陰の下で、惰眠をむさぼるのはなかなか気持ちのいいものである。でも時々、知り合いが通りすがりに、私のしどけない姿をチェックしていることもある。そして、後で「あそこで寝てたでしょ（仕事もしないで!）」と言われたりして、バツの悪い思いをするので用心しなくてはならない。

ぼんやりしたまどろみの中で、ふと窓の外に目をやると一匹の鹿がなにやら道路端に出てきているのが見えた。短い角をつけているので雄らしい。この雄は道路の横に溜まった落ち葉にしつこく顔を近づけている。鹿はこれまで何度も見たことがあったが、「ああ、また鹿か」というくらいで、気にとめたことはなかった。でも、この鹿があまりに熱心に落ち葉に顔を付けているので、一体何をしているのか確かめたくなった。

静かに車から降り、ドアをパタンと閉めると、鹿は一瞬体をビクツとさせたが、特に逃げるふうでもない。私が近づいていくとゆったりと森の中に入っていった。さて、どうしたもんかと思っただが、それほど嫌がられているわけでもなさそうだし、山歩きには少し自信がある。じゃあ、あの落ち葉に顔を付けるのは何なのかはつきりするまで、物好きにもあとをつけることにした。

森の中でもこの鹿は落ち葉に顔を付けながらポツポツと歩いて

いる。よく見ると辺りには紅葉した小さな落ち葉が散らばっている。そして鹿が顔を近づけると、その落ち葉が一瞬のうちにまるで手品のように消えていくのだ。その後には口をモゴモゴさせるので、それを食べているらしい。が、あまりにもすばやく消えるので本当に食べているのか半信半疑だ。鹿はひとしきり、その辺りの紅葉を消しきると、今度はトコトコと森の奥へ数十メートル移動した。

そこには、さつきとは別の種類の紅葉した落ち葉が散らばっている。見上げると、部分的に紅葉している大きな木があつて、その紅葉が時折、そよ風に吹かれてパラパラと落ちてきている。鹿はその下でさつきと同じように赤い落ち葉を消しにかかっている。こいつの口元にだけに集中して見続けてみた。すると、こいつは地面に溜まった落ち葉の上をまず鼻でクンクンしながら、赤い落ち葉の上まで来ると、それを吸い込む。そして、またクンクンしては赤い落ち葉を吸い込む、というのを繰り返している。どうやら舌で葉を吸いつけて口の中に取り込んでいるらしい。たまに別の種類の緑色のままの落ち葉や、黄色くなった落ち葉を吸い込みそうになるが、それらは口からポロツと落としてしまう。正確無比に赤い落ち葉だけを吸い込んでいくようだ。でも一体どうやってたぐさんの落ち葉からその紅葉だけを区別しているのだろうか？鹿が自分の口元がちゃんと見えているとは思えない。目は顔の横についているし、長い鼻づらも邪魔になる。だとすると、においか味とかひげの触感を使っているのだろうか。ここでも鹿はひとしきり赤い落ち葉を吸い込んで、また数十メートルほどトコトコ歩いていった。

次に行った場所は、なんとそこは最初に紅葉を食べていたとこ

ろであった。ちよつと留守していた間に、また赤い葉が新たに落ちてきたようだ。鹿はその落ち葉をまた食べ始めた。うーん、何本かの木を渡り歩きながら、その間に落ちてきたものを集めればいいなんて、何とお気楽な生活だろう。そこらの赤い落ち葉を一通り食べつくすと（とはいえこいつは目が悪いのか、私にはまだ少しこの赤い葉が残っているのが解るのだが）、時折、地面を鼻でクンクンしたりしながら、小さな沢の方へ降りて行った。

また赤い落ち葉を食べるのかと思いきや、今度は地面に落ちてゐる六センチくらいの紫色で丸いものを食べ始めた。どうやら野生のイチジクのようなのだ。このイチジクは鹿の口には大きすぎるらしく、そのままでは口に収まらない。そこでまず、この実をパクツと半分くわえ噛み切ろうとする。しかし、これがなかなか噛み切れない。何度も噛みなおしたり、くわえたまま首をブンブン振ったりして、かなり苦労している。やつとのもので半分に噛み切ると、モゴモゴと食べる。そんなふうにしてそこらに落ちてゐるイチジクを次から次へと食べていく。ここには別の種類のイチジクの実も落ちてゐる。大きさが一センチ弱のやや赤みがかつた白いものだ。これも食べるかと気になって見ていたら、ようやく一個を口に入れた。と思つたら、すぐに口の中からポロツと落ちてしまった。かなり好き嫌いが激しい。

この後、しばらくこの鹿の後をついて回つたが、こいつはぶらぶら歩きながら赤い落ち葉や、別の黄色い落ち葉を拾い食いしてゐた。あとは高さ一メートルくらいの稚樹の葉っぱを二、三枚、岩に張り付いたツルを少々、シダを一噛みしたくらいであった。地面をクンクンしながら歩いてゐるときに、二センチくらいのおさな木の芽生えをパクツと口に入れたこともあつたが、すぐに離

してしまった。芽生えがどうなったか心配になつて、まちかでの芽生えをよく見たが、引っこ抜かれることもなく、歯で傷をつけられてゐるようでもなく、大丈夫そうだ。

私は鹿は草食動物と言われているので草ばかり食べてゐると思つてゐた。でも、この鹿は草といふより木の葉っぱ、特に落ち葉を好んでゐる。また、結構くだものも食べる。しかも、食べ物を選び好みはかなりはつきりしている。これまでの鹿のイメージとは随分違うようだ。もつと見ていたかつたが、私も少しは忙しい身なので、もう行かなければならない。何か狐につままれたような気持ちになりながら、急いで森をあとにした。



五月十七日 午後 野外博物館・別館

私が昼寝に使っている例の森に向かう途中の道沿いに、ポツンと掘立小屋が立っている。この小屋に行けば自然のことが色々解ると聞かされていた。前々から気になっていたら、数日前に見た鹿のことも聞きたかったので、そこを訪ねてみることにした。

ボロイ木造の扉の上には「屋久島野外博物館 別館」という薄っぺらな看板が五寸釘で打ち付けられている。扉の脇には白いペンキで「本館はあちらです←」と書かれた木の看板が立っている。そうか、まともな建物は別にあるのか。でも、矢印が指す方向を見てみても、そこには延々と緑の山があるだけだ。ひよっとして島の反対側にその「本館」があるのかもしれない。とりあえず、この「別館」に入ることにした。

「こんにちはー」と声をかけ、ギイーと扉を軋ませながら開けると、暗い部屋の中には誰もいなかった。小屋の外観の印象とは違い、部屋は結構広く、薄汚れた木の本棚がぎっしりと並んでいる。部屋の真ん中には、四角い机一つとパイプ椅子が二つ置いている。その上にはクモの巣が絡みついた蛍光灯がぶら下がっている。テーブルには「当館の学芸員は不在です。本や資料はご自由に閲覧ください。」と張り紙がしてある。じゃあ、まあ適当にどんなものがあるのか見せてもらおうかと、蛍光灯のひもを引っ張った。

本棚は意外にもきちんと本の内容ごとに整理されている。だから、屋久鹿関係の本や資料はすぐに見つけることができた。その中の一冊の本を手にとった。古ぼけた感じのエンジ色の本で、金文字で大きく「ヤクシカの全て」と書かれている。でもその下に、取ってつけたように「の一部」と書かれたシールが貼ってある。

「ヤクシカの全て・・・の一部」って結局、ヤクシカのもろもろのこの一部しか書いてないということだろうか。著者は「動物博士 永田栗生」だそうで、なんかインチキくさい名前だ。それでも気を取り直して、鹿の食べ物のことが書いてありそうなページを探した。

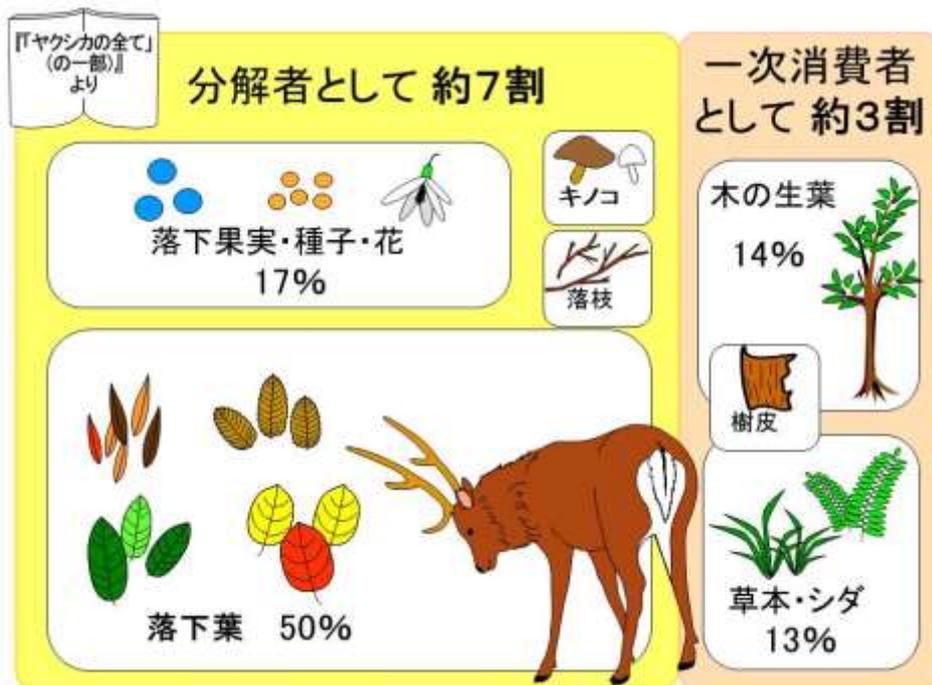


図1 ヤクシカの食物源。ヤクシカの主食である落葉のうち5割は紅・黄葉、3割が緑色葉、2割が茶色葉であった。落枝・菌類・樹皮の占める割合はとても低い。ヤクシカの食べ物の7割は地面に落ちてきたものであった。

『ヤクシカの全て』
(の一部)
より

ヤクシカの食物リスト (抜粋)

種名	採食部位			
アコウ	落葉・黄色	落葉・緑色	果実	樹皮
アリドオシ	生葉			
イイギリ	落葉・茶色	果実	花	
イヌビワ	落葉・黄色	落葉・緑色	落下枝	樹皮
ウラジロエノキ	落葉・緑色	落葉・黄色		
ウラジロガシ	生新葉	落葉・茶色		
エゴノキ	花	樹皮		
オガタマノキ	落葉・緑色	果実		
カラスザンショウ	落葉基部	樹皮		
クスノキ	落葉・緑色	落葉・黄色	落葉・茶色	果実
クマノミズキ	落下・緑色	果実	生葉	
クロキ	生葉	落葉・緑色		
サカキ	生新葉			
シマイズセンリョウ	生葉	果実		
シャリンバイ	落葉・赤色	果実		
木 シロダモ	生葉	落葉・緑色	果実	落下枝 樹皮
スギ	落葉・緑色	落葉・茶色		
スダジイ	生葉			
タイミンタチバナ	生新葉	落葉・緑色		
ツバキ	生葉	花		
木 バクチノキ	落葉・緑色	落葉・黄色		
ハゼノキ	落葉・緑色	落葉・赤色	種子	
ハドノキ	生葉	落葉・緑色	果実	
バリバリノキ	生新葉	生葉	落葉・緑色	
ヒメユズリハ	落葉・緑色	落葉・黄色	落葉・茶色	落下枝
フカノキ	落葉・緑色	落葉・黄色		
ハウロクイチゴ	生新葉	生葉	茎	
ポチョウジ	生葉			
ホルトノキ	落葉・赤色			
マテバシイ	生新葉	落葉・緑色	落葉・茶色	ドングリ
モクタチバナ	生新葉	落葉・緑色	果実	落下枝
ヤクシマフヨウ	花			
ヤマモモ	果実			
リョウキュウイチゴ	生新葉			
不明種	ポロポロの朽木			
不明種	黒くポロポロになった落ち葉			
他20種以上				
オオイタビ	果実			
ツル シマサルナシ	果実			
植物 シラタマカズラ	生葉	落下・緑色		
ツタ	生新葉	生葉		
植物 ハナガサノキ	落葉・黄色			
他4種以上				
草 クワズイモ	黄色葉			
ススキ	生葉			
チチコグサ	生葉			
木 ツフブキ	生葉			
他3種以上				
シダ コシダ	生葉			
コバナカナワラビ	生葉	枯葉		
ナチシダ	枯葉			
ケ ジャゴケ	生葉			
類 他2種以上				
菌 アラゲキクラゲ	キノコ			
類 他3種以上				
その他 サルのフン				
動物の骨				
土				
鳥の羽				
木の葉舐め				
水				

なにに、「・・・夏季においては高標高のシカはヤクザサを主要な食物としている。ただし、それ以外の季節についてはよくは解っていない。一方、低地林のシカは年間を通じて広葉樹の葉を食べることが多い。そのほとんどは落ちた葉である(図1)。この落ち葉の中では緑色のものよりも、紅葉・黄葉したものが好まれるようである。ただし、この理由についてはさまざま考えられるが不明である。この他、落下した果実や種子・樹木の生葉・草本類・シダ類などもしばしば食べる。ただし、これらの傾向は植林地や果樹園周辺など人間活動が多い場所では異なる可能性がある。」とある。なんか「ただし」の多い文章だな。図一を見てみると、やはり落ち葉をたくさん食べるようだ。

「ヤクシカの食物リスト」なるものも載っていて、かなりの種類の植物が書いてある。でも、ここにもただし書きがあつて「ただし、このリストは低地自然林で確認されたものの一部であり、また場所が変われば別のものを採食していると思われる」と言っている。このただし書きの多さが、この本の題名を「ヤクシカの全て」に「の一部」と書き足さなくてはならなかつた理由なのだろう。リストのなかで面白そうなのを探してみると、「黒くボロボロになった落ち葉」や「木の葉っぱ舐め」、「クワズイモの黄色くなった葉」などが挙げられている。それと・・・何だこの「サルのフン」というのは。本文には「特にサルが葉を多く食べている時期の緑色がかつた糞を好むらしい。」とある。さらに「動物の骨」や「鳥の羽」を食べるのも観察されているようだ。落ち葉やら、糞やら、骨やら、シカは廃物利用者のようである。そして、最後の方にはこうある。「・・・このように低地林のヤクシカの食物源の大半は地面に落ちてきたものである。従つて、

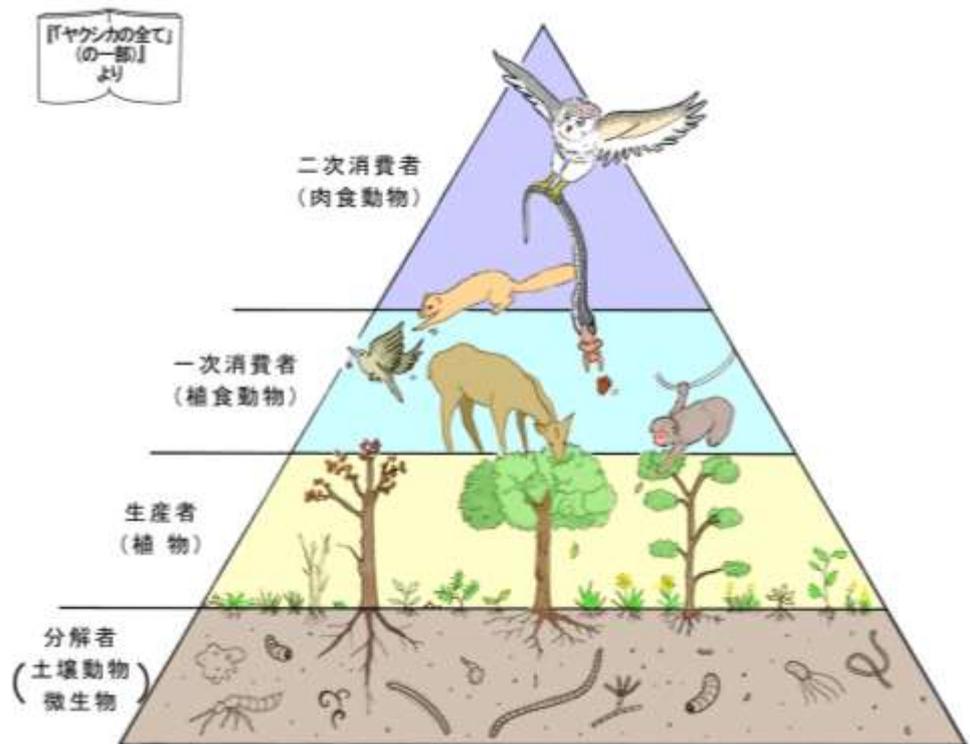


図2 生物ピラミッド。生態系は光合成により有機物を作り出す生産者(植物)、その植物を食物とする一次消費者(植食動物)、その植食動物を食物とする二次消費者(肉食動物)、そして、それらの全ての生物の遺骸や排泄物を食物とする分解者(土壌動物・微生物)で構成される。

生物ピラミッド(図2)の中では、森林内降下物(地面に落ちてきたもの)を主に採食しているシカは植物食者というより、分解者としての役割の方が大きいと考えることもできよう。分解者というシミミズとかバクテリアの類ということか。つまり鹿は「バカでかいシミミズ」だったのか!なかなか奥が深い。

だいぶ時間が経ったが、結局、学芸員は戻ってこなかった。私はこの本をもとの棚に戻し、分館を出た。西の空には夕日を浴びて妙にオレンジ色をした雲がいくつも浮いていた。

その夜の深夜 布団の中

バキュームカーのホースのような太いシミミズに角を生やした得体の知れない生き物が、森の中をヌメヌメのたくりながらズゴズゴ落ち葉を吸い込んでいる夢に、私はうなされていた。



ただし書き

このお話はフィクションです。ただし、主人公が体験したことや「ヤクシカの全ての一部」の記載は、筆者らが主に屋久島西部地域で行ってきたヤクシカの調査結果などを参考にしています。この原稿を書いた後の調査により、「ヤクシカの食物リスト」に挙げたよりもさらに多くの食物種をヤクシカは食べていることが解っています。